



令和6年10月22日

本学経営情報学部経営学科佐々木宏之教授が 執筆した論文が国際学術誌「Basic and Applied Social Psychology」オンライン版に掲載されました

本学経営情報学部経営学科 佐々木宏之教授が執筆した論文「Interaction of cognitive and motivational processes in asymmetric preferences for gains and losses(利得と損失に対する非対称な選好とその背後にある認知と動機づけの相互作用)」が国際学術誌「Basic and Applied Social Psychology」オンライン版に掲載されましたのでご案内申し上げます。

この論文は、平成30年度本学卒業生の越智雄大さんの卒業研究を基に指導担当の佐々木宏之教授が執筆した論文です。研究概要については、別紙をご覧ください。

以上

【問合せ先】

新潟国際情報大学 経営情報学部 経営学科
教授 佐々木 裕之

〒950-2292 新潟市西区みずき野 3-1-1

TEL 025-239-3111 (代)

E-Mail : sasakihi@nuis.ac.jp

そのリスク判断は直感か？ 目標の追求か？

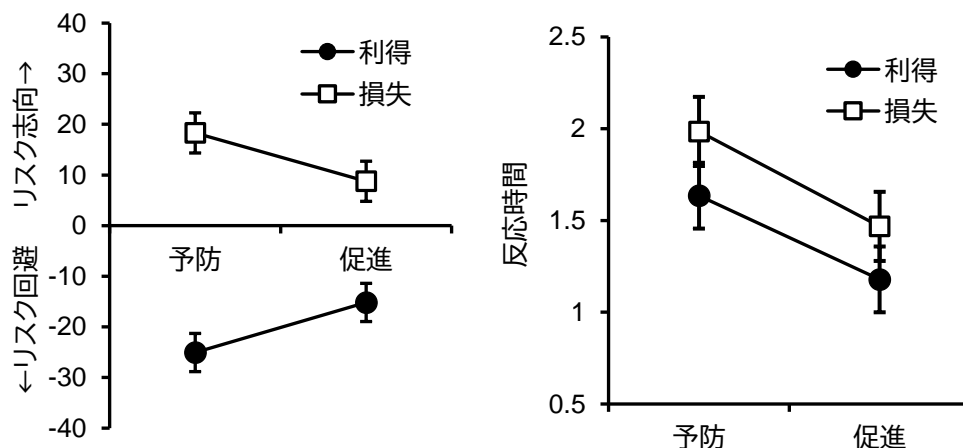
損得勘定の心理プロセスの解明

【概要】

日常の意思決定には、しばしば矛盾が伴います。例えば、リスクを伴う意思決定をする際、損失の可能性がある場面ではリスクをとってでも損失を免れようとし、利得の可能性のある場面では確実な利益を求めてリスクを回避します。このようにリスク判断が逆転する矛盾を、ノーベル経済学賞を受賞した Kahneman は、損失回避バイアスと呼ばれる認知プロセスの性質から説明しました。損失回避傾向が利得よりも損失を重く評価することから、利得場面のリスク回避と損失場面のリスク追求につながるのです。

利得と損失の非対称性は、動機づけプロセスが関与するリスク判断にも見られます。動機づけの仕組みには、目標達成を志向する促進システムと失敗回避を志向する予防システムがあると考えられています。そして、促進システムが働くと利得場面でリスク志向になり、予防システムが働くと損失場面でリスク志向になることが示されています。

認知プロセスと動機づけプロセスが同時に働くと、リスク判断はどのようなのでしょうか。この疑問に答えるため、本研究はリスク選択を繰り返す実験課題を用いて、利得・損失場面のリスク志向性と判断に要する時間を調べました。その結果（左下図）、認知プロセスの働きによる損失場面のリスク志向（ $\square > 0$ ）と利得場面のリスク回避が認められ（ $\bullet < 0$ ）、同時に、動機づけプロセスの働きによる利得場面での促進システムのリスク志向（右 $\bullet >$ 左 \bullet ）と損失場面での予防システムのリスク志向（左 $\square >$ 右 \square ）が認められました。反応時間を分析すると、認知プロセスの働きにより利得場面の方が損失場面より反応が早く、同時に、促進システムの方が予防システムより反応が早いという関係が見られました（右下図）。以上の結果は、認知プロセスと動機づけプロセスが、同時に独立並行に働き、その統合された出力結果としてリスク判断がなされることを示唆しています。



【文献情報】

Sasaki, H., Hayashi, Y., & Ochi, T. (in press). Interaction of cognitive and motivational processes in asymmetric preferences for gains and losses. *Basic and Applied Social Psychology*. <https://doi.org/10.1080/01973533.2024.2415914>